『雲南市文化財調査研究報告』第一集　抜刷
雲南市教育委員会　二〇二五年三月

三刀屋町・峯寺の大日如来坐像と観音菩薩坐像について

―雲南市新指定文化財の紹介―

濱田恒志

三刀屋町・峯寺の大日如来坐像と観音菩薩坐像について

―雲南市新指定文化財の紹介―

濱田恒志

はじめに

本稿で紹介するのは、雲南市三刀屋町に所在する真言宗の古刹・峯寺に伝わった二つの仏像、すなわち同寺本堂本尊の大日如来坐像と、同寺観音堂本尊の観音菩薩坐像である。このうち観音菩薩坐像については、既に二度、島根県立古代出雲歴史博物館の企画展に出陳され、当該市域に伝わる平安期の貴重な彫像として紹介されている。[1] 一方、大日如来坐像については、かねてより古像かとみられていたものの、これまでに詳細な情報が公にされることは無かったようである。

本稿筆者はかつて展覧会担当者として観音菩薩坐像を実査する機会があり、加えてこのたび大日如来坐像を実査する機会にも恵まれた。[2] その結果、両像とも平安後期の中央作例に準ずる整った作風を示し、雲南市域の当時の仏教文化を今に伝える貴重な遺例であると位置付けられ、令和六年（二〇二四）四月二十二日に雲南市指定文化財として指定された。そこで本稿では、両像の実査と指定に携わった立場から、その概要を報告しておきたい。なお以上の経緯により、本稿は本稿筆者が原案を作成した両像の指定調書と一部内容が重複する旨、了解されたい。

一、本堂本尊大日如来坐像（図1）

（一）本像の概要

〔形状〕

螺髻。左右二束の髪束を頂上で紐一条により括る。髻の元結紐は二条。天冠台を戴く（無文帯か。後補の宝冠に隠れて判然としない）。頭髪は、髻および天冠台下の両耳より前は疎ら彫り。他は平彫り。白毫相。耳朶環状貫通。三道相。条帛を左肩から右腋下にかけて懸け、下半身に裙をまとう。正面を向き、両手屈臂して腹前で智拳印を結び、右足を前にして結跏趺坐。

〔法量（単位はセンチメートル。以下同じ）〕

像高	九〇・一	頂―顎	三五・〇
髪際高	七一・五	面幅	一七・〇
面長	一六・四	面奥	二二・八
耳張	二二・〇	腹奥	二八・二
胸奥（左・条帛含む）	二四・五（右）二二・六	肘張	五三・二
膝奥（左）	五〇・三（右）四七・五	膝張	六九・〇
腋下張	二五・四		

膝高（左）一二・五（右）一三・〇

〔品質構造〕

木造（針葉樹）。古色。玉眼。

頭体幹部は一材製とみられるが、後補の表面仕上げ及び像底の蓋板のため、一木造りか割矧ぎ造りかは断定しがたい。内刳りする。髻頂に別材を矧ぎ足す。面部を矧ぎ（割矧ぎか）、玉眼を嵌入する。両手は肩・肘・手首で矧ぐ。両足部横木一材製、像底から浅く内刳り。体幹部材の腹部を深く刳り込み、両足部材はそこへ挿し込むように矧ぐ（体幹部材から前後二箇の角枘を作り出して両足部材の枘穴に挿し込み、さらに釘で固定しているようである）。表面は紙貼り（一部布貼り）のうえ黒色の古色塗り。

〔保存状態〕

両耳朶、両肩から先、両足部、金銅製宝冠及び冠繒・胸飾、玉眼、白毫、表面仕上げの全て、体幹部材像底の蓋板、台座、光背、以上後補。両足部は古材ではあるものの、体幹部材との緊結方法や材の断面に新しさがあり、造像当初まで遡るとは考えにくい。これに伴う体幹部材腹部の刳り込みや枘の彫出も大部分は後世の処置とみられる。

〔伝来〕

一、峯寺本堂の本尊像として伝来。

二、享保二年（一七一七）の地誌『雲陽誌』の当寺の項に「本尊大日長二尺五寸定朝の作なり」とあるのが本像に相当するとみられる（本像は髪際で約二尺三寸六分を計る）。

三、当寺には文政九年（一八二六）六月に「大日如来本堂一宇」を再建したとする棟札が残っており、本像に施された修理もこれと関わる可能性がある。

（二）作風と制作年代

以上の基本情報をもとに本像の作風と制作年代を検討したいが、それにあたっては本像の保存状態に注意する必要がある。まず、前掲のとおり本像には後補箇所が多く、当然ながらそれらは検討の対象外となる。また、本像の背面には後補の表面仕上げが剥がれて体幹部材の素地が露出している箇所が多く、そうした素地には朽損・虫害が認められ、干割れを鎹で留めた箇所およびその形跡もある。修理前の本像の状態は必ずしも良好ではなかったことが窺え、後補の箇所の多さや表面仕上げの厚さはそれゆえと考えられる。以上の事情から細部表現を比較検討することも難しく、頭体幹部の彫刻表現の概略のみによって判断する必要がある。

全体的に平安後期の都の作例に準じた的確で穏やかな作風を示すが、体軀の各部に豊かな量感が認められる。柔和というよりもやや精悍な顔つきをし、眉・鼻・唇の立体表現は明確で、頬には張りがある。体部の肉身表現には現実的な抑揚があり、体奥は深くとられている。全体に穏健でありながら量感や現実感を伴うこうした特徴から、本像の制作年代は平安後期のなかでも鎌倉時代に近い頃、十二世紀の制作を想定するのが穏当と思われる。

本像は智拳印を結んだ金剛界大日如来像の姿を示しているが、両肩先は後補であるため、当初からその尊格であった確証はない。しかしながら両肩に天衣を懸けた表現が見当たらないことを勘案すれば、もとより大日如来像として造像された可能性が高いだろう。雲南市域は密教系の山岳寺院

が集中する地域として県内でも有数であるものの、密教の根本尊たる大日如来の古像は、大東町・旧極楽寺伝来で同町・萬福寺現蔵像（県指定、十一世紀）が知られるくらいであった。このたび新たに古像と確認された本像は、雲南市域で栄えた密教文化の具体相を知るうえで欠かせない存在となるだろう。

二、観音堂本尊観音菩薩坐像（図2）

（一）本像の概要

〔形状〕

垂髻。髪束上下三段（上一束・中三束・下五束）を後方へ垂らす。天冠台は、後補の金銅製宝冠に隠れて確認し難いが、下から紐一条・連珠文帯・紐一条・無文帯か。髪は、髻および天冠台下の両耳より前は疎ら彫り。他は平彫り。耳朶環状、貫通しない。三道相。条帛を左肩から右腋下にかけて懸け、下半身に裙（折り返しつき）をまとう。正面を向き、左手は屈臂して腹の高さで掌を内に向けて第一・三・四指を曲げて未敷蓮華を執り（写真では外してある）、右手は屈臂して胸の高さで掌を内に向けて全指を軽く曲げながら未敷蓮華に添える。右足を外にして結跏趺坐。

〔法量〕

像高　八九・六　　頂―顎　三〇・四
髪際高　七三・七　　面幅　一四・七
面長　一四・二　　面奥　一九・一
耳張　一八・五　　腹奥　二五・〇
胸奥（左）二一・三（右）二一・七　　坐奥（裙裾含む）五三・四
膝奥　四五・三　　膝張　六七・五
肘張　五〇・九
膝高（左）一四・一（右）一四・二

〔品質構造〕

木造（針葉樹）。一木造り。古色。彫眼。

頭体幹部は両前膊半ばまでを含め針葉樹一材製。木芯は、後頭部右寄りをかすめていったん抜けたのち、背面右首筋を通る線にふたたび籠める。像底から内刳りするか。両手は前膊半ばより先を別製とする。両足部は横木一材製で、像底に蓋板を設ける。現状の表現は黒色の古色塗りで、所々赤褐色がかる。目に白色の彩色痕。

〔保存状態〕

両前膊半ばより先、両足部、両足部の像底蓋板（前後二材製）、持物（未敷蓮華）、金銅製宝冠及び冠繒、胸飾、表面仕上げ、以上後補。鼻の下半や口などには、後世に補修をした形跡がある。

〔伝来〕

一、峯寺観音堂の秘仏本尊像として伝来。
二、『雲陽誌』の当寺の項に、前掲の本尊大日如来像とは別に「本尊正観音長二尺五寸行基の刻彫なり」と記載されているのが本像に相当するとみられる（本像は髪際で約二尺四寸三分を計る）。
三、当寺には安永二年（一七七三）閏三月十七日に本像の台座・光背を新たに造立・供養したことを示す棟札が残っている。現存の台座・光背はこの時のものとみられ、金銅製宝冠や表面仕上げなど他の部分の後補も

いくつかはこの時に行われた可能性がある。

（二）作風と制作年代

本像もまた前掲のとおり後補箇所が多いため、頭体幹部の表現のみによって制作年代を検討したい。

平安後期の都の作例に準ずる整った作風をみせる点は、本像も先掲の大日如来坐像と同様である。しかし本像の場合、大日如来像にみられるような量感や現実感にはやや乏しく、全体におとなしい表現となっている。頭部は小さく、目鼻立ちの彫りは浅い。なで肩で細身の体軀を有し、肉体の抑揚はあまりつけられておらず、体奥も薄い。着衣には流れるような浅い皺を刻み、特に側背面の腰回りの衣文表現は流麗で装飾的である。本像が元は都の美麗な作風に準じた高い造形水準にあったことを窺わせる。本像の表現は、総じて現実的な立体感よりも平面的な装飾性を重視した傾向にあり、このことは本像が、鎌倉時代に近い頃と想定される大日如来坐像よりやや遡る作であることを示唆していよう。本像の制作年代は平安後期の中でも十一世紀と考えておきたい。

本像の後補箇所のうち、特に両前膊半ばから先が後補である点には注意すべきである。この箇所は立体表現が貧弱であるため本像の出来映えを減じているほか、現状、本像が聖観音像であることを造形から示しているのはこの箇所、すなわち左手で未敷蓮華を執り右手を添えるという手勢と持物によってのみである。つまり本像が造像当初から聖観音像であったか否かは、造形の観察からだけでは断定できない。ひとつ注意したいのは、本像の両肩は当初からの表現が保たれているが、先掲の大日如来坐像と同様、本像もまた両肩に天衣を懸けた形跡が無いことである。この点は通例の観音像と服制が異なり、むしろ大日如来像の特徴に通ずる。したがって本像が元は大日如来坐像として造立されたとも考え得るが、もとより確証のあることではなく、ここでは可能性を提示するにとどめたい。

おわりに

最後に、このたび新たに市文化財に指定された両像の、当地における地域史および美術史上の意義について述べ、まとめとしたい。

峯寺は雲南市域に数多く営まれた密教寺院のなかでも代表的な古刹の一つであるが、同寺に伝わる文献資料は、本稿で触れたいくつかの棟札を含めて大半は中世末から近世のものとみられ、それ以前の同寺の沿革については詳らかではない。ただ、中世以前の活動を知る手がかりは、少ないながらもいくつか存在する。

まずは仏画の存在である。峯寺は平安末期・十二世紀作の聖観音像（重文）をはじめいくつかの中世の仏画を所蔵していることが知られ、県の文化財にも指定されている。[3] ただ、仏画はあくまでも移動可能な大きさであるため、どの程度が古来同寺に伝わったものであるかは必ずしも明確でなく、ゆえにこれらの作品群から同寺の活動を想定するには限界がある。また、同寺地の山下の馬場遺跡では、規模の大きな墓とその副葬品、掘立柱建物、土器など多くの平安後期の遺構・遺物が見出されていて、[4] それらによって当時、この地域で一定規模の人々の営み、特に宗教的活動のあったことが想定し得る。こうした状況に、このたび本稿紹介の二軀の仏像が加わったのである。

両像が造像当初からこの地に安置されていたか否かを知るには、近隣作例との比較検討が有効であろう。しかしながら両像には後補部分が多いた

め、比較検討すべき面貌・耳・衣文などの細部表現は当初の様相が把握しにくく、また後補の両足部材が頭体幹部材の像底へ挿し込むように矧ぎ付けられていることから、像底から頭体幹部の当初の構造を把握することも難しい。少なくとも、制作年代が近いとみられる旧極楽寺の諸像（大東町・萬福寺現蔵。先掲）や加茂町・冨貴寺薬師如来坐像（県指定、十一世紀）などとは細部表現に隔たりがあるようだ。この問題については、雲南市域の彫刻調査をより活発に進めることにより、解決がはかられるであろう。こうした今後の課題はあるにせよ、少なくとも、このたび市文化財に指定された両像は、不明なことの多い平安時代の峯寺やその周辺地域の様相、ひいては雲南市域における密教寺院とその彫像の展開を考えていくうえで、欠くことのできない新たな重要作例だと位置づけられるだろう。

【注】

（1）展示の概要は次のとおり。会場はいずれも島根県立古代出雲歴史博物館。

・「企画展　秘仏への旅―出雲・石見の観音巡礼―」、二〇〇八年十月四日～十一月三十日。

・「特別展　島根の仏像―平安時代のほとけ・人・祈り―」、二〇一七年十月二十日～十二月四日。

また展示図録の情報は次のとおり。いずれも本像の写真と解説が掲載されている。

・島根県立古代出雲歴史博物館、島根県古代文化センター編『秘仏への旅―出雲・石見の観音巡礼―』図録（ハーベスト出版、二〇〇八年）。本像解説は一一八頁、執筆者は長谷洋一氏。

・島根県立古代出雲歴史博物館編『島根の仏像―平安時代のほとけ・人・祈り―』図録（同館、二〇一七年）。本像解説は一七七～一七八頁、執筆者は濱田恒志。

（2）両像の実査日は次の通り。本文中の両像の基本情報は、この実査による所見を元にしている。

観音菩薩坐像：二〇一七年十一月五日。実査者は濱田恒志。

大日如来坐像：二〇二三年十一月二十七日。同日の実査は雲南市教育委員会文化財課による市指定候補文化財の調査の一環として行われ、同課の助力を得て濱田が実査した。なお同調査において、峯寺所蔵の彫像のうち平安期に遡る作と確認できたのは本稿紹介の二軀のみであった。

（3）対象作品は以下のとおり。絹本著色不動明王二童子像（鎌倉時代）、絹本著色十二天像（室町時代）、絹本著色真言八祖像（室町時代）。上記は指定名称および指定時所見に準ずる。

（4）島根県埋蔵文化財調査センター編『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書十四　島根県飯石郡三刀屋町　馬場遺跡発掘調査報告書』（日本道路公団中国支社・島根県教育委員会、二〇〇一年）七十二頁。

【図版の出典】

全て島根県立古代出雲歴史博物館所蔵写真。

【付記】

両像の調査、文化財指定、本稿の掲載にあたっては、峯寺代表役員・松浦快遍様から長期に亘り格別の御厚情を賜り、雲南市教育委員会文化財課の皆様からは多大な御助力を賜った。末筆ながらここに記して御礼申し上げます。

図 1-2　同　右側面

図 1-1　大日如来坐像　雲南市三刀屋町・峯寺

図 1-4　同　背面

図 1-3　同　左斜側面

図 1-6　同　頭部右斜側面

図 1-5　同　頭部正面

図 1-7　同　頭部左側面

図 1-8　同　像底

図 2-2　同　右側面

図 2-1　観音菩薩坐像　雲南市三刀屋町・峯寺

図 2-4　同　背面

図 2-3　同　左斜側面

図 2-6　同　頭部右斜側面

図 2-5　同　頭部正面

図 2-8　同　像底

図 2-7　同　頭部左側面